



電力会社側の調査に疑問を投げかける山本博文福井大教授(中)ら。27日、東京・霞が関の経産省で

電力会社に「性急」批判

波大津に湾狭若 「過去なし」結論

原発十四基が立ち並ぶ福井県・若狭湾岸で津波の議論が活発化している。発端は、電力会社側が「過去にない」と主張してきた大津波が、複数の歴史書の記述から見つかったことだ。電力会社側はあくまで過去の大津波を否定するが、二十七日に都内で開かれた経済産業省原子力安全・保安院主催の意見聴取会では、専門家から疑問の声が相次いだ。(中崎裕)

歴史書に記述 専門家から疑問の声

「選ばれた調査地点 東日本大震災後、あらの泡だらけとなつて、いは、陸地が防波堤になつたため耳目が集まった戦つさいのものが海にのみ、津波が届きにくく、国時代の宣教師ルイス・こまれてしまった」
「場所ではないか。聴取 フロイスの『日本史』には 天正大地震(一五八六)で、保安院の説明が終 ころ書かれている。「大年」で若狭湾沿岸が大津波に襲われたとの記述を、山本博文・福井 量の家屋と男女の人々を、大津波が口火を切った。連れ去り、その地は塩水 受け、保安院は関西電力

脱原発 考

ず、堆積物がなかったから津波がなかったとは断じられない」と話し、電力会社側の結論は性急すぎる」と指摘した。

と日本原子力発電、日本原子力研究開発機構に再調査を指示。三社は今月二十一日、久々子湖(福井県美浜町)などで湖底の掘削調査を実施し、「大した津波はなかった」と方向づけた。
しかし、この日の会合では、山本教授のほか、産業界技術総合研究所の岡村行信、地層断層・地震研究センター長も「津波堆積物は必ず残るとは限ら

見つけた例もある。